

がん薬物療法専門医のコラム 第12回

皆さん こんにちは
新薬の情報も交えてコラムをと思いましたが、
今回は 『予後』 という 言葉を取り上げます。

日常的に予後という言葉を目にする機会はあまりないかもしれません。私が医療の現場以外で目にしたことがあるのは、競馬の世界における 『予後不良』という言葉くらいです。これは、競走馬が、骨折など主に足に怪我をして、回復が期待できず、薬物による殺処分（言い方を変えれば安楽死）にするのが妥当であると判断された場合に使うようです。競馬に詳しいわけではないので、もし間違っていたらすいません。

『予後』という言葉、簡単にいえば、『その後の見通し』という意味になるかと思います。医療業界で使う場合には、その病気の経過がどのようになるか、簡単にいえば、良くなるのか、そうならないのかを大雑把に表現するときに用います。

予後が良い = 治療経過が良い

予後が悪い = 治療経過が悪い と大雑把になるかと思います。

予後が良い = 完治する というのは必ずしも成り立ちません。

予後が悪い = 直る見通しが全くない ということも必ずしも言えません。

では、良い、悪い と区別する基準は、どこにあるものなのでしょうか？

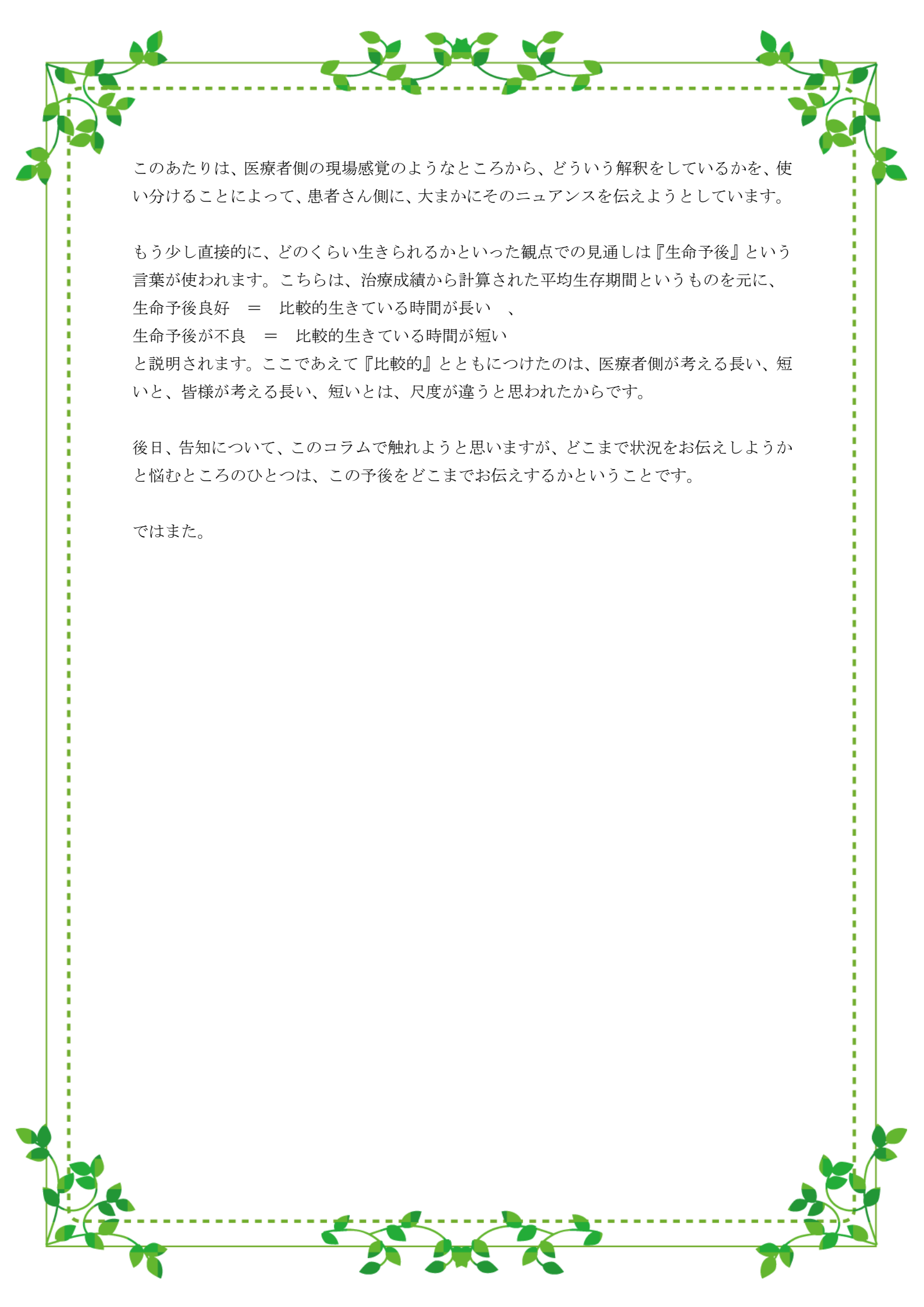
これは、その病気における、平均点を基準にして考えています。

学校のテストをうけたときのことを思い出してみます。平均点が70点のテストと、平均点が20点のテストがあったとするとどちらが簡単だと思いますか？当然、平均点70点のテストの方が、受ける側にとっては良いテストとなるのではないのでしょうか。

本題に戻します。

『がん』の領域では、平均点を表す一つの指標として5年生存率というものがあります。これは、がんの発生源によって、5年後に生きている確率を統計的に計算したものです。定期的に集計したものが、公開されていますので見たことのある方もおられると思います。仮に5年生存率が70%のものと、10%のものがあるとすると、誰がみても、70%の方が、予後が良いでしょうし、10%のものは、予後が悪いとなると思います。

では、40%のぐらいのものがあつたらどうでしょう？少し微妙な感じですよ。そういう場合には、例えば、50%近いのだから、まあまあだろうと考えれば、『比較的予後が良い』、という表現になりますし、50%切るのだからあまりよくないだろうと考えるのであれば、『比較的予後が悪い』 という表現になります。



このあたりは、医療者側の現場感覚のようなところから、どういう解釈をしているかを、使い分けることによって、患者さん側に、大まかにそのニュアンスを伝えようとしています。

もう少し直接的に、どのくらい生きられるかといった観点での見通しは『生命予後』という言葉が使われます。こちらは、治療成績から計算された平均生存期間というものを元に、
生命予後良好 = 比較的生きている時間が長い、
生命予後が不良 = 比較的生きている時間が短い
と説明されます。ここであえて『比較的』とともにつけたのは、医療者側が考える長い、短いと、皆様が考える長い、短いとは、尺度が違うと思われたからです。

後日、告知について、このコラムで触れようと思いますが、どこまで状況をお伝えしようかと悩むところのひとつは、この予後をどこまでお伝えするかということです。

ではまた。